（環境）矢作南小学校　４年

「もったいない」から始めよう

９月～１２月（２８時間）

１　ねらい

大量生産・大量消費という社会の中で「もったいない」という、物を大切にする姿勢が失われてきているように思われる。便利さや見栄えの良さが環境問題に勝っている時代である。便利で豊かな生活を希求する点は現在の４年生の子どもたちも同様である。学校生活を見渡すと、消しゴムや鉛筆などの落し物は取りに来ない、給食では大量の残飯が出てくる、ごみ箱の分別もあいまいなど、環境に配慮した生活を送ろう、浪費を減らそうといったことが行動として表すことができていないように思われる。

そんな中、「MOTTAINAI（もったいない）」という言葉を世界に広めようとしている人がいる。２００４年にノーベル平和賞を受賞したケニアのワンガリ・マータイ氏である。彼女は「MOTTAINAI」という言葉が３Ｒ（リデュース、リユース、リサイクル）の意味内容を一言で的確に表現していると絶賛し、持続可能な社会を築く活動のキーワードとして、この言葉を世界の言葉にしようとしている。

「食事は残さない」、「おさがりを着る」など、元来慎ましやかな生活を送り、物を大切にしてきた日本人が忘れかけている「もったいない」の考え方に焦点を当てることは、子どもたちにも物を大切にし、むだを省いて生活を心掛けようという態度を養うことができると考え実践した。

家の「いらないもの」紹介

２　実践の概要

まず、家の中で「いらないもの、捨ててもいいもの」を持ってくるという活動を行った。様々なものを持ち寄る子どもたちであったが、友達のものを見ていて、一様に「もったいない」、「まだ使えるよ」という言葉が出てきて、「もったいない」を意識する活動になった。

インターネットや書籍から「水道のぽたぽたでも１日に１８㍑の水が流れる」、「レジ袋を一年間で三百枚使っている」などを調べたクラスは、「もったいないで地球は緑になる」というワンガリ・マータイ氏の言葉を合言葉に、自分たちでできる「もったいない」活動は何かを考え、低学年の廊下を通ったときに、水道の閉め忘れが目立ったことや誰もいない教室の電気がつけっぱなしだったこととなど、普段の生活から無駄を見つけ出し、それらをなくしていこうと学校中を見回り、呼びかけをしていった。

閉めきれていない水道を見回る

また、二学期に給食委員会が実施している「給食の空っぽチェック学年一位」をめざしたこと

もあり、給食の残飯に関心が集まり「給食を残すともったいない活動」にも取り組んだ。調べた結果、ごはんの残りが全校で一日に平均二十二キログラム（おにぎり二三〇個分）もあることを知り驚いたようであった。学校中の食べ残しが減るためにはどうしたらよいのかを考え、残食が少ないクラスの工夫など取材したことをもとに、矢南小の残食が少しでも減るように三学期は広報活動を行っていく。

配膳室で残飯の量を測る

３　教師の支援

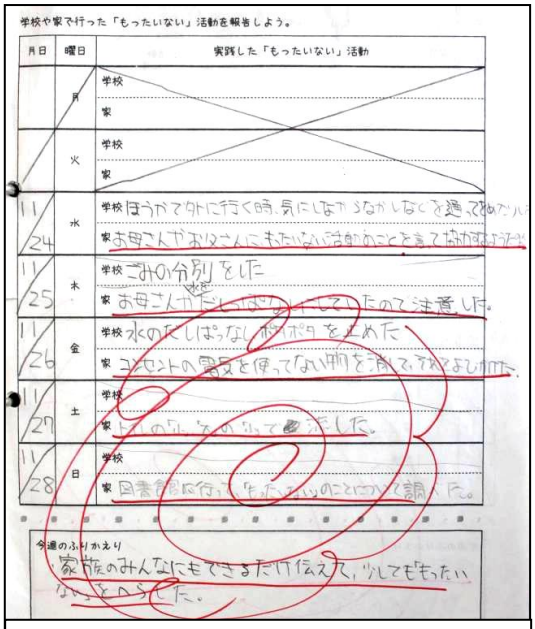
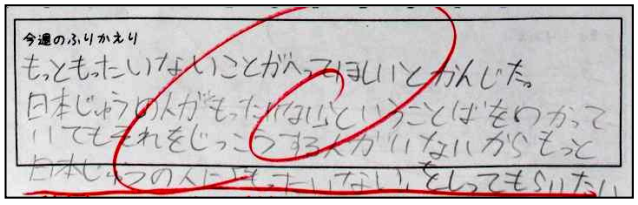
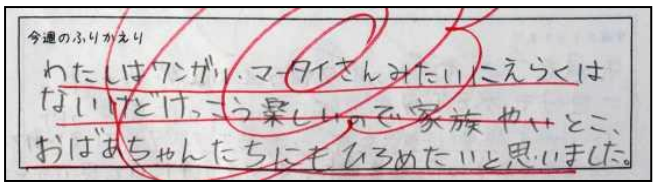
活動が長期にわたること、毎日続けていかなければならないこと、単調であることから子どもたちの意欲が停滞してしまうことを考慮し、自分たちの「もったいない」活動に誇りが持てるように「もったいない」活動のネームプレートを作った。また、先生達にも励ましの言葉をかけてくれるように頼んで、モチベーションの維持に努めた。活動の進捗状況が数値で表れる活動を取り入れるために配膳室で残飯の量を量る機会を設けた。

４　実践を振り返って

少しずつではあるが、水道の閉め忘れや電気の消し忘れが減ってきたり、給食センターでの学校別の残飯量で矢作南小の順位が上がったりすることで子どもたちは、意欲を持ち続けて活動に取り組めたように思われる。給食委員会の「空っぽチェック」で、４年生はいつも上位を占めるようになった。

学校の中だけでなく、家でも「もったいない」活動をしたいという提案のもと実施したところ次のようなふりかえりを書いてきた児童も見られた。

９月当初、「環境問題」や「地球温暖化」という言葉を知っているだけの子どもたちが、自分たちだけの活動で終わるのではなく、活動を広めていきたいという意見が出てきたところに子どもたちの意識の変化を感じることができた。



家での「もったいない」活動表